

日本の灯りに関する研究 ～種類とその変遷～

関西大学 大学院 理工学研究科 ソーシャルデザイン専攻 藤井 亜美
 関西大学 環境都市工学部 建築学科 准教授・博士(工) 亀谷 義浩

1 研究背景と目的

日本の伝統的な灯りは、日本特有の文化や歴史、生活感を表現し、日本人の精神性や価値観をもとにつくられた貴重な文化財である。こうした灯りが日本人の暮らしから馴染みの無いものとなることは、日本の伝統や文化が軽んじられ、徐々に薄れてしまい、今まで積み上げてきた日本の歴史や民族性を失うことに繋がるのではないかと考える。本研究では、日本の伝統的な灯りの種類を分類し、どのように誕生し、どのような変遷を辿ったかを明らかにするとともに、現在と過去で灯りの役割がどう変化したのかを調べ、その重要性を明らかにする。

2 研究概要および調査方法

本研究において日本の灯りとは「縄文時代から現代において日本人が使用してきた篝火、松明、灯台、行灯、提灯、灯籠、燭台、雪洞など」とし、以下の三種類の「使う灯り」に分類する。

- ①人が使う灯り：実際に人が手に持ち、触れて使用する灯り。
- ②建築で使う灯り：住宅や商業施設など、建築物の室内および室外(庭や玄関先)などにおいて使用する灯り。
- ③都市で使う灯り：街灯のように都市の中で不特定多数の人のために使用される灯りや、祭りなど多くの人が関わることに使用される灯り。

本論文では、「都市で使う灯り」について取り上げる。

(1) 種類

実際に灯りが使用されていた時代の絵巻物や書籍から灯りの種類及び変遷を整理・分類する。

(2) 分析・考察

整理・分類した灯りを元に年表を制作する。次に使う灯りを比較し、変遷の特徴を明らかにするとともに、日本の灯りとはどのようなものかを考察する。

使う灯り別に歴史・種類を整理したものが表-1である。

3 「都市で使う灯り」の変遷

古代において、火は神聖なものであるという宗教的な意識が非常に強かったため、贅沢に灯りを用いることは少なかった。

3-1 奈良時代

都市で灯りが使われ始めたのは、奈良時代に行われていた万灯会¹⁾が最も古いのではないかと考える(図-1,2)。この時代はまだ神事に火を用いることがほとんどであったため、当然街灯などは存在しなかった。それどころか日常生活に灯りを用いることすらなかった。そのため人々にとつ

て灯りとは非常に貴重な存在で、普段の生活にまた馴染みの無いもの

表-1 日本の灯りの変遷

分類	歴史	種類
人が使う灯り	三種類に分類した中で最初に暮らしに取り入れられた。縄文時代において鉄灯や高貴な人の道案内に用いられ、鎌倉時代になると職にも用いられる。江戸時代になり生業体制が整った職場が光源の中心となり、旅人が夜間でも街道や街を歩くための携帯用の照明、提灯の火袋に番号や家紋を描くことで身分の証明とするなどその役割も多様化する。明治時代になり光源の主流が電氣になると、町や建物は灯りに溢れ、人が使う灯りは徐々に衰退していった。	縄文ランプ、平火、松明、藪提灯、便殿灯、箱提灯、行灯、小田原提灯、ぶら提灯、弓張提灯、高橋提灯、馬車提灯、平燭、がん灯、豆ランプ、カンテラ、各灯、懐中電灯
建築で使う灯り	平安時代、貴族中心の文化になり、人間が堅穴式住居から寝殿造の邸宅に住まうようになってから発展しはじめた。灯油や蠟燭の灯りは弱く心許ないため、室内においてはなるべく使用者の近くに、擦え置いて使用するもの、また、近くに置く際に灯りを直接視界に入れないために、紙や木枠で覆われたものが多い。明治時代になり外国からガスや石油、電氣といった文化が渡来してくることで、より強い灯りを得ることが可能になり、近くに擦え置くスタイルから天井からぶら下げて室内を照らす照明スタイルへと変化した。	石圍炉、團伊裏、切灯台、高灯台、籠り灯台、丸行灯、角行灯、金網行灯、有明行灯、八間、燭台、雪洞、電氣スタンド、篝火、篝火、釣灯籠、石灯籠、釣提灯、ほおずき提灯、掛行灯、辻行灯
都市で使う灯り	都市の灯りの始まりは奈良時代に行われていた万灯会である。鎌倉時代になり、京や鎌倉の辻に、町の警備を目的とした武士の詰め所である篝屋が設置し、一晩中灯りを灯し続けたことで、都市の中に初めて灯りが出現した。江戸時代になり庶民文化が繁栄すると、旅行など旅業圏が発展し、同時に看板・乗客の役割を果たす提灯や行灯、旅人が道に迷わないため街道沿いに灯籠が設置されるなどして都市の灯りが充実してくる。明治時代になり電氣が普及すると、街灯が整備され始めるようになり、都市は夜間でも灯りに溢れるようになった。	万灯会、篝屋、石灯籠、縁也行灯、ガス灯、アーク電灯、蛍光灯

であり、多くの灯りで照らし彩られた寺院は極楽浄土を表現する一大イベントであり人が多く住む都市を賑わせていたのではないかとと思われる。



図-1 薬師寺



図-2 観音山

3-2 鎌倉時代

鎌倉時代になると、現代と違って夜間は暗闇であったために治安が悪くなり、京や鎌倉といった大都市では火つけや強盗が多発する。それらを取り締まるために、武士の詰め所である篝屋(図-3)は、都市の灯りとして非常に心強いものであったと推測する。またこの頃から、死者を弔おうとする武士の文化から、盆という風習が根付き始める。お盆の時期に墓に供え、卒塔婆の役割を果たす装飾的な盆

灯笼（図-4）は、鎌倉時代に武士たちによって死者がでた家の軒先に供える風習が根付いたと言われている。



図-3 「一遍上人絵伝」より簞屋



図-4 盆灯笼

3-3 江戸時代

江戸時代になるとようやく現代でいう街灯の役割を果たす灯りが都市に設置され始めるようになる。江戸時代の町の様子を描いた「熙代勝覧」の絵巻を見ると、立ち並んだ町屋の店先に辻行灯（図-5）が置かれていることが分かる。他にも遊郭の大門や番所の前に木灯笼（図-6）や石灯笼が立てられたりと、主に建物の入口や辻において灯りが置かれ始めた。現在の様に、街中にあるというわけにはいかないが、陽が落ちてからも遊郭や宿屋を利用する客や旅人が街中を往来していたことを考えると、十分に街灯の役割を果たしていたのではないかと考える。



図-5 「熙代勝覧の日本橋」より辻行灯



図-6 「東海道五十三次」より木灯笼

また江戸時代は大山参りや伊勢参りの名目とした旅行が流行したため、旅人が道に迷わないようにと街道に石灯笼（図-7）が置かれ、常夜燈（図-8）として火が灯されていた。火が高価なものであることは依然変わらなかったが、人の暮らしが栄えるとともに灯りも徐々に暮らしに馴染み深いものとなりつつあった。

他にも大名宿の本陣では、大きな定紋入りの箱提灯や引張提灯を灯しておくことで、都市の灯りとなっていた。これだけ都市に灯りが浸透しても、やはり夜は提灯を携えなければ出歩けない程に街は暗かった。



図-7 「東海道五十三次」より石灯笼



図-8 「東海道五十三次」より常夜燈

3-4 明治時代

明治時代になり、はじめて都市に街灯が設置された。明治3年に横浜の実業家がフランスより技術者を招き、ガス灯（図-9）を設置した。さらに2年後、県庁付近の外路にガス灯を徐々に設置しはじめ、ここから全国の都市部へと街灯が普及するようになり、都市は夜間でも灯りによって照らされるようになった。明治16年、銀座2丁目の大倉組の前でアーク電灯（図-10）の点火式が行われた。これをきっかけとして翌年には京都の祇園に、翌々年には大阪の道頓堀と人が多く住まう大都市においてアーク電灯が設置され始めた。



図-9 ガス灯



図-10 「東京銀座通電気燈建設之図」よりアーク電灯

3-5 大正時代

大正時代になると街灯だけではなく商店街にもすずらん灯（図-11）が設置されるようになる。現在でも商店街で見ることができるすずらん灯は、当時は商店街の象徴とも言える特徴的な形状をしていた。商店街以外にも繁華街では現代のように看板に電飾を内蔵し、集客の目印とした（図-12）。



図-11 すずらん灯



図-12 電飾看板

3-6 昭和時代

昭和時代には、都市の様子は現在とほとんど変わらず、街中に灯りが溢れ始めるようになる（図-13）。大通りに面した道路には街灯が置かれ、建物からは蛍光灯による灯りがこぼれ、大通りから外れた路地でさえほとんどの店先に置かれた看板提灯や掛行灯の灯りにより明るく照らされている。都市が灯りに溢れ、光によって騒がしくなっていた。



図-13 土屋光逸の浮世絵より光に溢れる街

3-7 平成時代

平成時代になると都市にはより一層灯りが溢れる。また祭りの提灯や行灯に電球やLEDを使用するようになり、一層華やかなものとなった。LEDを内蔵したカプセルを川に流す灯籠流し(図-14)が行われるなど、伝統的な祭事が現代風にアレンジされつつある。また、都市の中において大規模なイルミネーションが行われるようになり、クリスマスなどの時季イベントにおいて盛大にライトアップされている。商業空間においては、ライバル施設との差別化を図るために商業イルミネーションが多く行われている。店舗などに限らず商店街や地域の商工業の活性化を図るため、街路樹などにイルミネーションを施し集客や地域の活性化といった目的で灯りが使用されることがもはや常識になりつつある(図-15)。



図-14 LEDを用いたカプセル型の灯籠



図-15 商業イルミネーション

4 「都市で使う灯り」の種類

日本の灯りの変遷について調査し、年表(表-2)を制作した結果、「姿を消した灯り」「姿を変えて使用されている灯り」「そのままの姿で使用されている灯り」の3種類に分類できることが分かった。それぞれの特徴や種類を表-3に示す。

表-3 変遷の分類と特徴

分類	特徴	種類
姿を消した灯り	使用場所や使用目的が局所的で、日常生活において使用していた灯りは姿を消している傾向にある。他にも火災等の危険性が高いなどの理由で使われなくなったものもある。	縄文ランプ、石囲炉、便殿灯、小田原提灯、ぶら提灯、馬乗提灯、がん灯、豆ランプ、カンテラ、角灯、切灯台、高灯台、籠り灯台、金網行灯、有明行灯、八間、篝火、ガス灯、アーク灯
姿を変えて使用されている灯り	デザインが多形で、汎用性に優れたものは形や光源をより現代の暮らしにおいて使用しやすく改良され、今も使われ続けている。	箱提灯、引強提灯、高強提灯、丸行灯、角行灯、雷洞、釣灯籠、石灯籠、釣提灯、ほおずき提灯、掛行灯、辻行灯、誰也行灯、万灯会
そのままの姿で使用されている灯り	古くから伝わっている宗教的な意味合いの強い伝統習慣において使用されている灯りは音からの姿や光源で使用され続けている。	松明、手燭、燭台、一部の主に祭りに使用される提灯・行灯・灯籠類

4-1 姿を消した灯り

「都市で使う灯り」では篝屋、ガス灯、アーク灯が挙げられる。篝屋は鎌倉時代に京や鎌倉の辻に作られ、江戸時代まで続いたが、武士の時代が終わると共にだんだんとその姿を消していった。ガス灯は開国と共に日本に渡り来たが、震災により大規模な火災の原因となったことや安

価で明るいアーク電灯が発明されたことで撤去され姿を消した。ガス灯に代わり街灯として普及したアーク灯は、後に電球や蛍光灯など、より安価で照度の高い光源が出現したことにより役目を奪われ、姿を消した。このように時代背景や技術の進歩によって灯りは姿を消す。

4-2 姿を変えて使用されている灯り

外見が変わった、あるいは光源が変更されているが現在においても使用されている灯りには万灯会、辻行灯、掛行灯、誰也行灯、石灯籠、木灯籠が挙げられる。行灯は動植物の油に火を灯していたが、光源が灯油になり、現在は電球やLED照明に変化した。江戸時代は室内の唯一の照明器具として活躍していた行灯だが、現代においては和風空間を作り上げるインテリアの一環として、またはあえて控え目な明るさにする事で間接照明として使用されるようになり、姿を変えて使用されている。灯籠は奈良時代から神社や寺院で献灯に用いられており、神聖な意味合いが強かったが、江戸時代には街道沿いに設置され役割が旅人の道案内に変化した。現在では本当に火を灯すことは少なくなり、神社や寺院において見る人に和の印象を強く与えることができるため、和風空間を作り上げる役割を担っている。このように照明という

役割が時代とともに和を演出するインテリアとしての役割に変化した。

4-3 そのままの姿で使用されている灯り

外見や光源も変わらずに使用されている灯りは「都市で使う灯り」では蛍光灯が挙げられる。これは出現時期が遅いため、現在もそのままの姿で使用されている。しかし省エネやエコが主流となり、技術が更に進歩することで、蛍光灯からLED照明に移り変わりつつある。

5 まとめ

「都市で使う灯り」は鎌倉時代に初めて出現して以降、徐々に街中へ灯りが浸透するようになったことが分かった。その使用目的も献灯から警護、更に集客や宣伝のためと時代を経るにつれて、使用の幅も広くなりつつある。現在では、多くの人が往来する都市部において、灯りは必要不可欠なものとなり、暮らしの中に灯りは溢れ、日常生活で灯りを大切に扱い、情緒を重んじる日本人の精神性が薄れつつある。

また「都市で使う灯り」の姿を変えて使用することで、和空間を作り上げる要因となっていることや、姿を消したものを復元することで夜景スポットとして観光地となっている。このように姿を消した灯りを再度見直すことで、今後の街づくりに日本の灯りを活用し、情緒を重んじる日本人の精神性を現代の灯りにも表現することが可能になるのではないだろうか。

謝辞

資料収集、研究発表に協力していただいた別島早紀様に感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 小松茂美(1987)『年中行事絵巻』、中央公論社
- 2) 小松茂美(1991)『春日権現験記絵』中央公論社
- 3) 藤原千恵子(1996)『図説浮世絵に見る江戸の一日』、河出書房新社
- 4) 日本浮世絵協会(1980)『原色浮世絵大百科事典』、大修館書店
- 5) 小澤弘, 小林忠(2006)『『熙代勝覧』の日本橋』、小学館

6) 織田一磨、川瀬巴水、土屋光逸、小林清親の浮世絵、「ゆあさ行灯アート展」、
<http://lepo.fool.jp/green/andon/index> (2012/10/21 アクセス)

表一 2 日本の灯りの年表

時代 分類	縄文時代	弥生時代	飛鳥時代	712~ 奈良時代	794~ 平安時代	1185~ 鎌倉時代	1392~ 室町時代	1603~ 江戸時代	1868~ 明治時代	1912~ 大正時代	1926~ 昭和時代	1989~ 平成時代	
人が使う灯り	縄文ランプ		手火		松明								
							籠提灯 便殿灯	箱提灯 小田原提灯 ぶら提灯 弓張提灯 高張提灯 馬乗提灯					
								手燭 がん灯	豆ランプ カンテラ 角灯				
							行灯				懐中電灯		
	室内 建築で使う灯り	結灯台				切灯台			丸行灯 角行灯				
		石囲炉	囲炉裏			高灯台 眼り灯台			金網行灯 有明行灯 八角 燭台 雪洞		座敷ランプ 電気スタンド		
						釣灯籠 石灯籠							
		庭火							釣提灯 ほおずき提灯 高張提灯				
	室外												
		篝火							掛行灯 辻行灯 辻行灯 掛行灯 誰也行灯 石灯籠 木灯籠				
灯都市で使う													
				万灯会(灯籠)			篝火		ガス灯	アーク灯	蛍光灯		
光源	イノシシやイルカなど動物の油			蜜蝋燭の輸入	ナタネやゴマなど植物の油			蠟燭	ガス、石油	白熱電球	蛍光灯	LED照明	
人々の暮らし	竪穴式住居一日の大半は屋外				寝殿造り日中室内で過ごす板間の上で生活	書院造り置の上で生活間仕切り発達		数寄屋造り町屋	畳に座る生活様式から、椅子に座る西洋様式へ	電気による街灯や室内照明が普及	空襲により木造家屋が焼失都市開発		

※ 姿を消した灯り 形を変えて使われている灯り そのままの姿で使われている灯り